

(10) 2003年11月28日 大谷大学図書館報(第21号)

重要文化財『三教指帰注集』

河 内 昭 圓 (教授・中国文学)

山田文昭教授は明治十年(1877)に生まれ、昭和八年(1933)に亡くなられた。真宗大学すなわち現在の大学を卒業し、教授・図書館長をお勤めになったのであるから、生粋の谷大人である。歲月流れ、いまでは知る人も少なくなったが、真宗史学上の、そしてまた図書館蔵書の充実を図るうえでの業績は大きい。在職中、職務研究のかたわら教授は善本古書の蒐集に精励されたが、生涯を閉じられてのちは、それらの多くが本学図書館に寄贈された。約250点におよぶ寄贈書はいずれも善本に類する。

『三教指帰注集』はそれら山田文昭教授旧蔵本の一本である。天地28センチメートル、左右15.5センチメートル、三巻四帖から成るこの古鈔本は、平安末期楮紙に浄写された最上の善本である。本文と同じ楮の共紙に黄土と胡粉を引いて表紙となし、細い竹ひごを添えて小口を補強した全容は、原装の姿をとどめ、重厚にして豊潤な香を放つ。1996年5

月、重要文化財の指定を受けた。

書名は弘法大師空海(774-835)の撰述とされてきた『三教指帰』の注釈書であることを示している。『三教指帰』は、序文に伝記を記述した部分があり、古来これをもって空海自伝と解し、その文意から空海出家宣言の書として歴史的に貴重であった。膨大な量を誇る空海研究の諸論のうち、これに言及しないものは検索に困難をとまう。

『三教指帰』の古注としては、従前から「勘注抄」・「成安注」・「覚明注」の三種が知られていた。このうち「覚明注」は前二家を采摭して一部を成したもので、唯一江戸初期書写の完本並びに少し遅れて出た刊本が残るが、藤原敦光(1063-1144)の「勘注抄」、詳細不明の「成安注」はいずれも完全本が存在しないと考えられていた。

大谷本『三教指帰注集』は、開巻第一丁「三教指帰注集卷上并序」と記す題下に「釋成安注」の墨痕をとどめるように、「成安注」



三教指帰注集卷
表紙裏面と第一丁表

の完本である。すでに完本は亡佚したと考えられていた学界の常識からすれば、この天下の一品は、多くの稀覯本がそうであるように、じつに長い期間、昏々と眠り続けていたことになる。近年これを揺り動かして覚醒させた者は、佐藤義寛助教授である。

1985年4月、本学大学院授業に碩学花房英樹博士を迎えてこの善本の講読が開始されたが、佐藤氏の研究はこれを受講して一人懸命に発表当番に当たったことに始まり、1992年10月『三教指帰注集』の研究』(大谷大学刊)の刊行に一応の終結を迎える。研究の緒について以来七年余にわたるあいだ一貫して花房教授の学恩を受けたが、全巻にわたる精密な釈文、訓点・引用書の整理、成立と書写年代の確定、上記のごとき料紙・装丁にいたるまで、研究の成果は詳細を尽くしている。なかでも訓点・古佚文献の学術に寄与するところ甚だ多いといえる。

わたくしが最も惹かれたのは、注集の成立と書写年代である。『三教指帰注集』すなわち「成安注」の成立は寛治二年(1088)であり、大谷本の書写者は東寺観智院の厳寛、長承二年(1133)から同三年にかけて浄写された。成安・厳寛ともに詳細は明らかでないが、時代をもっていえば、平安末期にあたり、真の古鈔本といえる。加えてただに古鈔本であるのみならず、『三教指帰』本文としても現存最古の善本であるという点が注目される。

『三教指帰』は延暦十六年(797)空海二十四歳の時の作とされてきた。大谷本が現存最古の鈔本であるとするならば、空海が撰述してのち三百年余の間この書はどうしていたのか。一体、書物はその書き手が生存しているときから世間の評判を得るとは限らない。杜甫にしてもはたまた清少納言にしても、彼らが世間に評判を得るには多くの時間を必要とした。しかし空海の場合はそれらの事例と同日に論ずるわけにはいかない。空海は一代のうちに鎮護国家的な秘密修法をもって奈良仏

教を凌駕し、朝廷のおぼえもめでたく、多くの優れた弟子にも恵まれていたものであり、評価に時間的な断層があったということではないからである。とりわけ『三教指帰』は既述のようにその序文に自叙伝が述べられているという共通理解があって、特別な意味を持っていた。それがなぜ三百年余の空白を生むのか。一方で同じ延暦十六年の年紀を有し、古くから『三教指帰』の未再治本・初稿本・草本などと位置づけられてきた国宝の真筆本『聾瞽指帰』が秘在し続けていた事実を鑑みると、その長い空白をどう理解すればよいか。ここに問題が生ずる根源がある。

『三教指帰』と『聾瞽指帰』は、全体の大部分を占める本文は同一の内容を持つ。巻首に冠した「序文」と、巻末論旨を総括した「十韻詩」、それに書名と巻数を異にするにとどまる。しかしその相違が宗門の人たちにとって重要であった。『聾瞽指帰』の「序文」は文学論に終始して教義に及ばず、巻末「十韻詩」は六朝の三教論争よろしく仏教絶対有利を強調する。一方『三教指帰』の「序文」には自伝の記述があり、真言密教との出逢いが記される。「十韻詩」は儒・道・仏三教融和が詠われて総括とする。そして文学研究者として何よりも気になるのは、『聾瞽指帰』の「序文」が本文との緊密な関係をたもって六朝駢文で一貫するのに対して、『三教指帰』のそれは古文ともいえぬ雑駁な文体である。「十韻詩」についても、一は本文の主意に合致して仏教絶対優位を詠い、一は本文主意に離反して三教融和を詠う。作詩の作法にも大きな違いが認められる。『三教指帰』の偽撰を疑うのが自然であった。

『三教指帰』偽撰説の提示』を公表したのは、『大谷大学研究年報』第45集(1994年3月)誌上であった。佐藤氏の研究に誘発されて起こしたこの論文の公表には逡巡するところがなかったわけではない。主題の性格上、およぼす影響が少なくないことを承知してい

たからである。反論に応答する準備を進める一方、批正を求めて抜き刷りを差し出した諸大家からは、賛意を表わす書簡が届いた。爾来十一年が経過した。この間正面切ったの反論に逢うことなく、あれほどに盛んであった空海を論じた刷り物を目にするのも稀であった。このごろではテレビや催し物のなかで、従来ならば明らかに『三教指帰』とすべきところ、『聾瞽指帰』と言い換える場面を散見するようになった。結局わたくしの偽撰説は論争になることなく、歳月に借りて無言のままに衆目の認知するところとなった。反論に備えて用意した資料は、いま積み上がった書類の山に隠れて、たちまちにはその所在が明らかでない。

佐藤助教授の研究によれば、『三教指帰注集』において撰者成安が施注に用いた引用書は、和漢の内外典およそ二百種類におよんでいる。佚書佚文も多く含まれるが、それらの総てを原典からの直接引用とは考えにくい。かなりの部分については何らかの類書からの引用である可能性が高い。また和漢の別でみれば、圧倒的に漢籍が多く、内外典の別でいえば、内典は五十数種にとどまり、しかもそのほとんどが一度きりの引用である。圧倒的に外典が多数を占めるが、これは『聾瞽指帰』と同じ内容を持つ本文が、堂々たる六朝駢文であれば当然の結果である。

この調査報告は、また別個の問題を提起する。原典・類書を問わずおよそ二百種類におよぶ典籍を引用して施注する事実は、成安の学識が尋常でないことをものがたるからである。「成安注」にわずかに遅れて出た「勘注抄」の藤原敦光が大学文章博士として紀伝・詩文を司り、空海の伝記に関わる『弘法大師御誕生記』一卷・『弘法大師行化記』二巻を残すほか作詩に長じていたことから推しても、有識の成安は他の文献に少なくともその名だけでもいまに見ることがあってよいのではないかと思う。しかしいまだに微少のことさえ

も杳として判然としない。

大谷本『三教指帰注集』序文には本書成立に関わって注目すべき記述がある。「ここに一禅僧有り。其の人命じて曰く、是れ三教論は、儒筆最も繁く、本文至って多し。庸愚悟り難く、末学迷い易し。乞うらくは、汝本書を考し、集注す可しと。」一禅僧の命を受けて成安がやむなく筆を執るにいたったということである。『三教指帰』に注釈を加えるという作業はただごとでない。それを命じた者の名を隠すとはいかなる意味をもつか。佐藤助教授は「一禅僧」を学僧南岳房済暹(1025-1115)と推論する。妥当な見解である。書写者厳寛の上巻表紙裏面に「此の序は是れ南岳房の筆なり。成安の作に非ず。元序は成安草す。南岳房将来精談す。」と書き込む文が推論の妥当性を補完する。同様の書き入れが上巻本巻末の識語にもみえるが、要するに巻頭の序文は成安の草案に済暹が筆を加えて精密を期したというのである。成安の序文とはいいながら、じつは済暹の文であるという解釈が成り立つ。

もっとも、上記序文の一部と、厳寛の書き込みは、その理解が必ずしも容易明白でない。紙数が尽きてしまったので短絡していえば、成安は済暹の脱化ではないかと、わたくしは疑っている。済暹は承暦三年(1079)に空海の『遍照發揮性靈集』十巻のうち後部三巻が失われたとし、自ら空海の文を求めて『補闕抄』三巻を編し、その欠落を補完した人物である。しかも補完された『遍照發揮性靈集』第八巻以降にはすでに専門家によって偽撰と判断されている文が多くあり、そのなかには高野山の寺領を規定する「高野四至啓白文」などが含まれる。済暹の補完作業は甚だ戦略的であったと見るができるわけで、何にせよこの人の動向には注意を要するであろう。

かくのごとく、大谷本『三教指帰注集』は今後さらにさまざまな問題を提起する真に貴重性を有する稀観本である。